

冬木の芽

松岡隆子

けふの晴あしたの晴や冬木の芽
顔あげて歩く枯木に囲まれて
十二月八日の水面まつ平ら
深閑と沼の拡がる冬至かな
一陽来復高空を鳥ながれ

煤逃げの漢らとゐて沼を見て
綿虫の一人になりてよりの数
枯蘆の高さよ倒れざる高さ
からうじて彩あることを冬薊
冬木の芽意志もつもの寡黙なる
空白に重さとふもの古日記
稿遅々とポインセチアの灯が赤し